

編集部が迫る!



発達保障って
なんぞですか?

軍国主義、管理主義の教育の中では、決して豊かな人間性は育たない。Uさんの死は師範教育に対する痛烈な批判でした。しかし、当時だれが正しくそれを受けとめてくれたでしょうか? いまも続く私の怒りです。

元気の源は何ですか?

たぶん、人間が好きで大切に、気の毒な人が気になるからでしょう。私が小学校に入学したのは1931年で15年戦争の始まりの年でした。

下駄箱のそばにしょんぼり立っている女の子がいました。同級生のサヨちゃんです。サヨちゃんは背が低いので教室の席は一番前でした。でも一度も手をあげないし声も出さない。同じ部落の子と遊んでいるときは声を出しているのに。「落第」という言葉がどこから伝わりました。サヨちゃんは一年生を繰り返しているらしい。でも、先生はサヨちゃんに発言の機会をつくってあげなかった。私はいつもそれが気になっていました。

また、学校には入り口までみんなについて登校しながら、外で遊んでいる男の子がいました。視力の弱い子でした。歩けない子はお

上杉 文代さん その3 (全3回)



うえすぎ ふみよ
1924年、和歌山生まれ。8男3女の長子。1943年、和歌山女子師範卒業、国民学校勤務。敗戦後結核のため休職をくりかえす。1954年に和歌山県立ろう学校就任。1985年退職。以後、地域の障害者問題に深くかわる。

しました。

私は較ぶべくもない私の拙いハイマートロスを重ねました。まったく両極となる「無償の論理」の世界も。

女学校に入学した1937年には日支事変がはじまり、出征兵士を送り、遺骨を迎え、戦争は身近



▲2007年 フィンランドにて



▲17歳の頃

雑草が根をはるように生きていく
故里人の姿忘れず

戦死の公報には驚きでした。広い校庭では関兵分裂行進が繰り返され、配属下士官による馬事訓練もありスポーツは全開。乙女

になりました。物資は欠乏し主食は配給制度に。しかし学校にはまだ学ぶ楽しさがありました。しかし、1941年、学んだ憧れの女子師範はもう学校というより兵営でした。

男子には兵役の義務があり女教師の増員が必要であり、合格者は倍増していました。授業は改定された学習指導要領の解説であり、ただ一人それをせず、「人生の目的は何か」と語りかけた教師はその一時間だけで招集され、すぐに

母さんに背負われて運動会や学芸会を見に来ていました。入学免除の子どもたちです。

大人のなかにも少し足が悪いだけで結婚もできず生家の百姓を手伝っている男の人、黙って兄嫁の子育ての手伝いをしている腰の曲がった女の人、ぶつぶつ吃りながら歩きまわる人。変わり者と笑われたり無視されたりしていた人々。彼らは雑草のように生きていました。

その人たちが私の心に棲みつき生きる力になっていたのでしよう。

「なぜ、元気にいろいろするんですか?」とよく聞かれますけれど、逆に「あなたはなんでしないんですか?」と聞きたい。青春は、いろいろな方法で生きる目的を求める時だと思えます。その時に何を求めたかということが大事。やりそこなってもいいから、自分のやりたいことをやってみること。それでだめならやり直したらいい。私にはやりたい夢がいっぱいあるのです。

若者たちの希い・発達

青年期の若者は仲間のなかで自己に目覚め、自己を拡大し充実させていきます。未来にあるべき自己の姿を描き、現実との矛盾に葛

の青春は弾けているかに。そのなかで女子学校時代、成績の評価だけで支えていた私は見事に落ちこぼれました。

それを救ったのが12月8日の真珠湾攻撃の時、特殊潜航艇で散った9人の海軍士官の行為でした。彼らは死後の栄誉などは知らない。なぜ自ら死ぬのか。私にはできない。自分ができなくてどうして生徒に「お国の為」、など言えるのか。考え続けた私はふと「無償の論理」という言葉に救われた気持ちになり、悟りを啓いたように高揚した私は炊事当番や風呂焚きなど、すすんで代行し、時局講演会には八紘一字について語りました。また、父のいとこで敬愛する海軍少尉候補生が繰り上げ卒業と聞くと、千人針をつくり、安全カミソリで指を切り血書して贈りました。

親友で同郷のUさんが教育実習で研究授業の朝「自分は教師にならない」と日記に書き、安全カミソリで頸動脈を切り自殺しました。私の豹変がUさんを安全カミソリに導いたのではという自責を今も背負っている。

変えよう。
憲法9条を活かし、
住みよい社会に!

藤するのです。私もそうでした。

私は最近、民主文学の作家、右遠俊郎の『青春のハイマートロス』という短編集を読みました。ハイマートロスはドイツ語で、放浪、故郷喪失、人間として大切な夢を忘れたときに使われるそうです。

この一冊は7つの短編からなり、著者自身と思われる主人公、元郎が育った満州大連から引き揚げ、無一物で東大生となり辛酸をなめた約10年間の放浪、その仲間たちの姿が刻まれています。

仲間たちは卒論も危いなかで同人誌を出そうと言う。元郎は大連での友人の伝聞を作品にしようとする。

それは友人Sが恋人を目の前でソ連兵に犯されながら何もできなかった話です。元郎はSを通じて恋人を励ます。

「自分を石ころと思え! 石ころは踏まれても蹴られても傷つきはしない。死なずに生きる」と。

無傷の論理を展開するのです。しかし心身を酷使した放浪は、肺をむしばみ、やっと得た高校教諭のいすにも定着できず郷里岡山の結核病院へ。ここで人間裁判を闘う朝日茂とその仲間たちに出会うのです。

右遠の人間変革は重なり、ついに不朽の作品『小説朝日茂』を遺

卒業は1948年。山間の竜神国民学校。九軍神の写真を教室に掲げ、私はアラビアンナイトを語りながら戦争も語った。飛行機にあこがれた少年は少年航空兵の試験を受けに雪の朝を出ていき、貧しい家庭の少年は病む父を置いて満州の開拓団に万歳で送り出された。

1945年、敗戦を迎えたのが海辺の印南国民学校。学校ではもう授業がなく、毎日が出征軍人の家の勤労奉仕。教室は疎開児であふれ、校庭は堀り返されてイモをつくり、牛も飼い、17人の職員のうち男性は4人。他は女教師だった。そこでも私は、神風は吹くと教える教師だったのです。

だから私の8月15日は暗く、からだの中の空洞を風が吹き抜けたのです。翌年の夏、本当に結核休職に。

その私が今年90歳です。なぜ生きてこられたのか。憲法に保障された教員組合の共済制度のおかげです。そして障害児教育、全障研との出会いがあったからです。

現在の若者は生きづらい世代を生きています。どうか青春のエネルギーを逆噴射させることなく矛盾を乗り越えてください。

みんなで権利条約の活きる住みよい社会をつくりたいですね。